平成２６年度　ＮＩＥ実践報告

曽於市立大隅中学校

１　ねらいの継続と発展

本校では３年目の取り組みをしているが，基本とするねらいは変えていない。

教師側は**「①　ただの教材で終わらすのではなく、質感のある教材としての活用を授業内でおこなう。」「②　生徒が新聞を読む習慣を身につける動機付けをはかる。」**

生徒側は**「①　新聞を読もう。」「②　新聞で学ぼう。」**である。

これに基づく実践報告は前年度までに報告している。

そして，今年度ＮＩＥ係会としての反省点ならびに方向性として挙げられたのは**「新聞に親しむ場の設定」と「授業実践」**が不足であった。そこで，これらをねらいの発展として付け加えることとした。

２　実践内容

（１）　展示コーナーの充実（継続）

（２）　朝読書で新聞記事を読み，意見を書く（継続）

（３）　学校行事や総合的な学習の時間での生徒による新聞作り（継続）

（４）　コンクールへの参加（継続）

（５）　**新聞に親しむ場の設定**（発展）

（６）　**授業実践**（発展）

３　実践報告

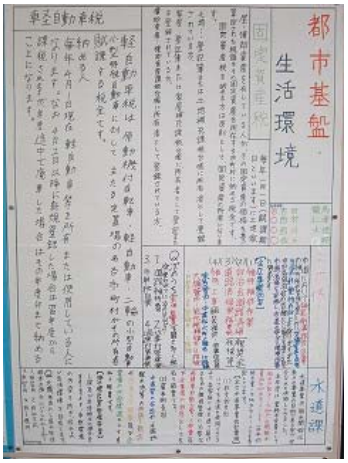
（１）　展示コーナーの充実（継続）

生徒玄関の掲示スペースで各教科更新掲示していく。

（２）　朝読書で新聞記事を読み，意見を書く（継続）

（３）　学校行事や総合的な学習の時間での生徒による新聞作り（継続）

２年生租税教育・修学旅行，３年生職場体験学習を新聞にまとめ，文化祭で展示発表した。



（４）　コンクールへの参加（継続）

第４回南日本新聞曽於地区よむのびコンクールに応募し，教育長賞１名，１席１名，２席３名受賞した。

（５）　**新聞に親しむ場の設定**（発展）

①　ねらいの背景

昨年度，本校ではＮＩＥ教育先進校視察と言うことで東京の開進第三中学校・砧中学校・王子桜中学校に派遣，そして東京ＮＩＥ協議会事務局長の先生とも意見交換をする場を設けることが出来た。そこでの実践紹介の一つに「教室に新聞を置く」という取り組みがあった。ねらいは自然に生徒が新聞を読めるように報告の為の実践ではなく，本当の意味での日常的な実践という印象が残り，本校にも取り入れようということになった。もちろん視察の際にも言われたことではあったが，「販売店さんの協力」が必要であり，そのことをクリアした上で本校でも不定期に南日本新聞を各教室に一部ずつ置くこととした。

また，ねらいの教師側②，生徒側①・②とも関連が深い。

②　実践を通して

まずはコミュニケーションツールとして役立ったことを挙げたい。新聞は朝から教室に置いてある。給食時間などに担任が読んでいると中学三年生であっても興味深く教卓の周りに寄ってきて，記事をもとにした会話や意見交換になったり，新しい記事に話題を広がったという報告がいくつもあった。実は中学校の現場ではなかなか担任がクラスにいない状況が多いのだが，教育的効果は大きいと思われる。数値化されることはないが，学級指導や生徒指導へも有効であろう。本校ではＮＩＣ（newspaper　in　class）として来年度も継続し，実践を深めていく方向にある。

さらに身近なところに新聞があると，教師側から情報を発信しやすい場面が増えるという利点がある。教科担当の中学校の場合，複数の教師が一つのクラスを担当する。時に新聞を授業の導入時に使ってみることができた。時には「それ，前の時間〇〇先生も話しました。」といった場面もあった。とにかく授業導入時での自然な活用には有効であった。

最後に新聞を授業で使っても，見出しや概要といった程度，つまりそれ程詳しく使わないこともある。しかし，授業が終わってその記事に興味を持った生徒は新聞記事をさらに読み深めようとしたりもする。知的好奇心を喚起し，行動に移させることが出来るＮＩＣ。何よりそうした場面を見ると教師としては大変嬉しい。

以上，身近に新聞を置くことの東京実践の効果は今年度の大きな収穫であった。

（６）　**授業実践**（発展）

①　実践をするにあたって（係会での確認）

ただの教材で終わらすのではなく、質感のある教材としての活用を授業内でおこなう。これが本校ＮＩＥ教育の教師側のねらいの①である。

ところで，何のために「新聞」はあるか。決して授業や学校で活用されることを主眼としているものではない。メディアだから「情報」を我々に伝え，時に世論を喚起する役割が本来の目的ではないか。新聞には政治経済から地域の行事，学校の話題，事件や　事故，はては産声やお悔やみ欄，等々いろいろな情報が書かれている。

しかし情報という点ではテレビという視覚や聴覚に訴えるツールや，時間や距離を感じさせないインターネットなどがある。いずれも新聞より優れている点があるので教育現場の中でテレビやインターネットが活用されているだろう。だから何も新聞でなくても，と感じる教員がいてもおかしくない。

ではなぜ新聞なのか？係会では，ぬくもりが通った感があるから授業にあっていると確認した。また，重さもある。すぐに知りたい，はネットで，詳しくは新聞で，と言った具合に使い分けていることが多いとの意見集約もした。そして，その差を生むのは新聞は記者の取材があるから，つまりそれがぬくもりが通った感ではなかろうか。国会での質問にも使われることもある新聞記事，記者さんの独自取材は相当なものだとわかるし，朝のテレビ番組では新聞記事を紹介するものは多い。各メディアの記事のソースが新聞にあることは容易に想像できる。何より思いの通った感は均一でないのがよい。

例えば新聞社毎に違う説明内容や数字の出し方，これはあった方が授業では扱いやすい。もちろん教師の情報リテラシーも問われるが，新聞は授業の主役ではなく，質感の高い教材なのだから，「あっ，これ使えそう」位の感じで教育現場に広めていきたい。ではその質はどこで決まるか？

情報には「information」「intelligence」がある。世の中の動きはどうかな？こんなことがあったんだ，なるほど，と言ったものは「information」。読者目線で読む。一方，情報には非常に興味関心をひくものがある。目線ではなく，視線で読むのが「intelligence」。我々が現場で扱えばそれは全て「intelligence」と言えるのではないか。多くの情報の中から選ばれたもの。自分の代わりに教材を見つけてくれた記者の方に敬　意を込めて私たちはあえてそう呼ぶべきだと確認した。

そう言えば「intelligence」には質感の高い，知的，と言う意味もある。

② 授業実践

ア 道徳（平成２６年９月５日（金）１校時　対象：全学級）

９月１日から６日までを「いじめ問題を考える週間」と位置づけ，５日１校時に全学級一斉に，道徳の授業を行った。

新聞記事を読んで，これまでの自分を振り返らせるとともに，どのような対応が望ましいかを考察させた。そして，５人程度のグループを作り，感じたことなどを話し合わせた。聞く側は，共感的な態度で話し合いに参加させ必ず全員を発言させるように留意した。

イ 社会科（平成２６年１１月２１日　１校時　対象３年３組）

３年生公民「企業を通して経済を考えよう」で，企業努力について理解させる場面でで新聞記事を活用した。新聞の見出しに注目させ，企業がどのようなことをしているかを読み取らせた。

4　成果と課題

昨年度からの実践である展示コーナー，朝読書での活動，生徒による新聞作り，コンクールへの参加に加えて，新聞に親しむ場を設定することで，日常会話の中で新聞をもとにしたコミュニケーションが増えてきている。生徒が新聞を読む習慣をつける動機づけが達成された。また，授業で新聞を教材として扱うことで，子どもたちの社会への興味が高まり，理解が深まった。

しかし，ＮＩＥ実践校として，全校態勢での取り組みには到っていない。今後は全校での実践に高められるように，他校の実践から学び研究に努めたい。